

観光系学部での学びと経験は異業種で どのように活かされるのか

—卒業生へのインタビュー調査から—

How Can Learning and Experience in Tourism-Related Departments Be Utilized in Different Industries?

—Based on Interviews with Graduates—

淑徳大学 小山 知子

Shukutoku University Tomoko KOYAMA

Abstract

This study aimed to clarify how graduates of tourism-related departments who work in unrelated industries utilize their university learning and experiences in their jobs. Semi-structured interviews were conducted with 12 graduates. Analysis of the verbatim transcripts based on Broudy's (1977) three classifications of knowledge (Knowing that / Knowing how / Knowing with) revealed the following : One individual working in the bridal industry demonstrated Knowing that, where specialized knowledge was directly applied to her work. Among the 11 working in different industries, their university learning experiences were reinterpreted as a foundation for situational judgment and interpersonal relationship building, functioning as Knowing how and Knowing with. Notably, narratives positioning learning as a future growth challenge could also be interpreted from the perspective of PFL (Preparation for Future Learning).

These findings demonstrate the plasticity of learning and experiences gained in tourism-related faculties, enabling them to manifest as diverse forms of knowledge depending on the employment sector. This offers implications for university career support.

Keywords : *Tourism-related Departments, Preparation for Future Learning, Learning Experiences*

1. はじめに

本研究の目的は、観光系学部を卒業し、観光とは異なる業界に勤務する社会人が大学時代の学びと経験を日常業務の中でどのように位置づけているのかを明らかにすることである。特に (1) 観光系学部での学びが現職に活かされていると感じる場面があるか、(2) 活かされている場合にはどのような内容として表れているのか、の二点について探索的に検討

する。

観光系学部で学んだ学生の約8割が観光産業以外の業種・業界に就職しているという状況は、長年にわたって続いている(七枝, 2020)⁽¹⁾。森下(2018)⁽²⁾の調査でも、就職時に観光産業を第一志望とする学生が半数に満たない大学が65.5%を占めると報告されている。こうした状況のもと、高橋(2019)⁽³⁾は、観光産業はもとより他業界でも活躍する人材を

輩出し、社会にどのような役割を果たすかという問題意識を持ち続けることが重要であると述べている。

一方、小山 (2025) ⁽⁴⁾ は、観光業界を志望して入学したものの、大学生活を通じて観光以外の進路を検討するようになった学生の進路意思決定プロセスを明らかにしている。調査対象者は、2年生の夏ごろから自らの価値観や志向を問い直し、「観光業界以外の進路を検討する必要がある」と感じ始めていたことを確認した。こうした学生にとって、観光系学部で身につけた知識や経験が他業界でどのように活かされるのかという情報は、進路選択に伴う不安を軽減し、自身の可能性を広く捉え直すための手がかりになると考えられる。

しかし既存の観光教育研究は、観光産業に対応した人材育成 (小林, 2009) ⁽⁵⁾、教育内容の検証 (矢島, 2013 ⁽⁶⁾; 加納, 2013 ⁽⁷⁾; 井上ほか, 2018 ⁽⁸⁾) などを中心であり、観光系学部生が観光以外の業界に就職した後、大学での学びをどのように活用しているのかを検討した研究の蓄積は浅い。また、大学から職業への移行に関する研究は、言語・文学、歴史学、政治学、経済学、社会学、心理学といった分野が対象であり (二宮, 2025) ⁽⁹⁾、観光学については十分に検討されていない。

そこで本研究では、小山 (2025) ⁽⁴⁾ の調査対象者を中心に卒業後の再インタビューを実施し、観光系学部で身につけた専門的知識や学習・経験と従事している仕事との関連の特徴を明らかにしていく。

なお、本研究は理論の検証を主眼とするものではなく、卒業生の語りを手がかりとして、これまで十分に検討されてこなかった観光系学部での学びと仕事との関係について、新たな視点を探索的に提示するものである。

2. 先行研究の検討

2.1 観光系学部での学習経験

森下 (2018) ⁽²⁾ は、観光を専攻できる4年制大学58校へのアンケート調査をもとに、観光系学部が学生に身につけてほしい知識として「問題解決に関する知識 (ロジカルシンキング)」75.9%、「観光・実務に関する知識」72.4%、「マーケティングに関する知識」74.1%、「経営戦略の知識」44.8%を挙げている。また、カリキュラム構成については大きな偏りはなく、社会科学系、人文科学系、経営学系、就職・実務系など、多領域を横断する科目編成が一般的であったと述べている。

日本学生観光連盟 (2015) ⁽¹⁰⁾ の学生報告によれば、「観光学から人を楽しませる方法論を学んだ、と理解していれば、卒業生はそれぞれの業界で大学での学びを応用することができる」とし、観光と関連付けて自分の進路を広く捉えられるよう、学生を育成

することが重要だと指摘している。

高山 (2020) ⁽¹¹⁾ は、観光学を観光地・観光産業・観光行動と密接に関わる学問領域として位置づけ、フィールドワークやプロジェクト型学習を取り入れた実践的科目の重要性を示している。こうした先行研究から、観光産業への就職に直結する専門教育を重視する大学も存在する一方で、多くの観光系学部は観光を媒介として社会・経済・文化を広く学び、観光産業以外の領域でも活躍できる人材の育成を目指して教育にあたっていることが読み取れる。

2.2 人文社会系学部における学習経験と仕事との関連

二宮 (2024) ⁽¹²⁾ は、地方私立・公立大学の人文系学部・学科を卒業した社会人25名への聞き取り調査を通じ、大学の学習経験がどのように仕事に役立つと認識されているのかを明らかにしている。調査の結果、役立つ知識・技能として「専門的な知識」「専門的な知識に基づいた経験」「汎用的な技能」を挙げている。また役立つ経験として「グループワーク」「実習」「卒業論文・ゼミレポート」「ゼミナール」を確認している。

これらの学習経験が挙げられる背景には、在学中に「真正の評価 (authentic assessment)」に資する課題に取り組む機会が多いことがある。二宮 (2024) ⁽¹²⁾ はこうした経験を踏まえ、大学在学中と卒業後の二つの時点で「経験学習 (experiential learning)」が進展している可能性を指摘している。たとえば、大学時代には難解であった哲学を学んだ経験が、就職後、業務に必要な文章を読解しなければならない場面、自らの考えを相手に分かりやすく伝える場面において関連づけられるなど、学習経験の意味づけが再解釈される事例を紹介している。

以上のことから、大学での学習経験は、卒業後の日常業務で直面する課題を通して再解釈され、経験→省察→新たな意味づけへと循環する「経験学習」として作用していると考えられる。しかしながら、学際的な学問領域である観光学を中心に学んだ場合、観光分野以外の業務において専門知識がどのように活かされるのかについては、明らかになっていない。

2.3 大学時代の学び・経験と転移研究

二宮 (2024) ⁽¹²⁾ は、大学時代の学習経験が、卒業後の職務経験を通じて再解釈され、「経験学習」のプロセスが生じたことを明らかにしている。このように大学での学びが時間を経て異なる場面で活かされる、あるいは活かされていると認識される現象は、学習の転移に関する既存研究とも関連している。

山口 (2008) ⁽¹³⁾ は、Bransford & Schwartz (1999) ⁽¹⁴⁾ が提起した Preparation for Future Learning

(将来の学習のための準備、以下、PFL) の概念を整理し、従来の学習の転移研究における評価枠組みを再検討している。従来の転移研究では、学習者が獲得した知識が新たな状況においてどの程度再生、適用されるかを重視していたという。しかし、学習場面と実践場面の文脈が大きく異なる場合、この枠組みでは学習経験の価値を十分に説明できないことが指摘されてきたと述べている。

こうした課題に対し、山口 (2008) ⁽¹³⁾ は、PFL の概念を支える理論的基盤として Broudy (1977) ⁽¹⁵⁾ の知識の三分類: Knowing that (複製できる知識)、Knowing how (応用できる知識)、Knowing with (学びの転移) を取り上げている。Broudy (1977) ⁽¹⁵⁾ によれば、学習経験は知識として記憶されるだけでなく、状況に応じて意味づけられ、判断や理解の基盤として柔軟に働く場合がある。特に「Knowing with」は、過去に獲得した概念や経験を使って、新規な物事について知ることができるというものである。Broudy (1977) ⁽¹⁵⁾ は「Knowing with」の例として、教育を受けた人が学校で学んだことを求められたときに再生することはできなくても、学んだことを使って考えたり、理解したり、判断することはできるといふ現実を反映していると述べている。山口 (2008) ⁽¹³⁾ は学習の転移研究における評価枠組みを再検討する中で、「Knowing with」が PFL の核心を構成すると位置づけている。つまり、学習経験を「即時的・直接的に役立つかどうか」で評価するのではなく、将来の学習や新たな課題への適応を支える基盤として捉える視点が重要であると指摘している。観光系学部での学び、経験を Broudy (1977) ⁽¹⁵⁾ の知識の三分類: Knowing that (複製できる知識)、Knowing how (応用できる知識)、Knowing with (学びの転移) にあてはめると表 1 のようになる。

表 1. Broudy (1977) の知識の三分類

PFLの分類	知識の種類	観光系学部での学びと経験の例
Knowing that	事実・概念の知識をそのまま用いる	世界遺産検定や観光地理の知識を直接活用して旅行案内を作成する
Knowing how	技能・経験を応用して業務に活かす	フィールドワークで得た調査方法や観察の視点を、業務での情報収集や顧客対応に応用する
Knowing with	知識や経験を統合し、新しい状況の理解に活用する	観光の知識や異文化理解を用いて顧客との距離を縮め、関係構築や信頼獲得に結びつける

(出所) 筆者作成。

この視点は、大学での学びが卒業後の職務経験を通して再解釈されるという現象を捉えるうえで有効ではないだろうか。とりわけ観光系学部を卒業し、異業種に就職した場合、観光系学部での学びと経験を日常業務に直接的に活用する機会は少ないであら

う。しかしながら、大学での学びと経験を何らかの形で再解釈し、学んだことを業務で使えるか考えたり、経験したことが判断の助けとなっている可能性はある。大学時代に学んだり、経験したことが業務に活かされている場合にはどのような内容として表れているのか、を検討する本研究の目的に照らすと、Broudy (1977) ⁽¹⁵⁾ の三分類: Knowing that (複製できる知識)、Knowing how (応用できる知識)、Knowing with (学びの転移) は卒業生の語りを構造的に把握するための分析枠組みとして適していると考えられる。

そこで本研究では、卒業生への再インタビューを行い、その逐語録を Knowing that / Knowing how / Knowing with の三つのカテゴリーに分類し、観光系学部での学びが異業種においてどのように位置づけられているのかを明らかにする。この枠組みを用いることで、学習内容が直接的に活用される場合だけでなく、経験の意味づけが変化しながら従事している業務に影響をおよぼすプロセスも含め、学びと経験を広く捉えることができると考えられる。

3. 調査

3.1 調査対象者と学びの環境

調査対象者は、関東圏内の A 大学観光系学部を 2023 年度～2025 年度に卒業した 12 名 (すべて女性) である。小山 (2025) ⁽⁴⁾ で取り上げた 7 名と新たに 5 名に協力を仰いだ。12 名のうち、11 名 (A～K) は観光とは異なる業界に勤務し、1 名 (L) はブライダル産業に勤務している。Broudy (1977) ⁽¹⁵⁾ の三分類を分析の枠組みにするにあたり、観光系学部での学びと経験がどのようにブライダル産業での業務に活かされているかどうか、確認するために 1 名 (L) に調査を依頼した。L のデータは、観光業界における学びの活用のあり方を把握し、異業種の 11 名との比較の手がかりとするために用いることとする。

12 名のプロフィールを表 2 に表す。

表 2. 調査対象者のプロフィール

	業種・業界	職種	卒業年度
A	建設	総務	2023
B	クリーニング	受付	2023
C	介護	介護	2023
D	宝飾	販売	2023
E	証券	営業	2024
F	厨房機器	営業	2024
G	教育	営業	2024
H	IT	SE	2024
I	広告代理店	営業	2025
J	アパレル	販売	2025
K	印刷	営業	2025
L	ブライダル	ゲストリレーション	2025

(出所) 筆者作成。

3.2 調査時期と手続き

2025年1月～9月にかけて、オンラインにて半構造化面接を行った。質問内容は「現在の仕事内容について教えてください」「観光系学部での学び(授業、ゼミナールなど)、経験(学内外のサークル、インターンシップなど)のうち、今の仕事に活かされていると感じている内容はありますか」「あるとしたら、どのような内容ですか」「大学時代に学んでおけばよかったと感じていることがあれば、教えてください」であった。大学卒業後から現在まで、どのような仕事に携わっているか、また大学時代を振り返ってみるとどのように感じているか、できるだけ自由に語ってもらった。

面接時間は一人約60分、事前に許可を得たうえで内容をICレコーダーに録音し、後日逐語録を作成した。倫理的配慮として、調査への協力は自由意思による、途中で調査を中止、中断しても不利益を被らないことを説明した。本研究は、川村学園女子大学の研究倫理審査にて承認を得ている。

3.3 分析方法

収集した逐語録をもとに、KJ法(川喜田, 1967)⁽¹⁶⁾の手続きを援用して質的分析を行うことにする。本研究は、これまで十分に検討されていない「観光系学部での学びと経験は異業種でどのように活かされるのか」を探索的に検討することを目的としている。KJ法は、発話や文脈を維持した状態で、全体的な特徴を把握することができるため、PFLを分析枠組みとし、Knowing that / Knowing how / Knowing withの三つのカテゴリーに分類する手法が最適であると判断した。

まず、観光系学部での学びと経験が従事している業務に対し、どのように活用されているかに関する語りを1つの意味単位ごとにカード化し、現在従事している業務にどのように活かされているのか、という関連を確認した。ゼミナールや課題解決型授業で培われたプレゼンテーション能力を業務に応用しているという語り、観光地が抱える課題を事前に調査し、課題解決の視点を持って現地を訪れた経験を顧客への提案に活用しているという語り、「ホスピタリティ入門」や「コンシェルジュ論」での学習を通じて形成された対人理解や状況判断の視点が業務に活かされているという語り、観光地理や世界遺産の知識や観光地特有の情報を顧客との会話に活かしているという語りについて、意味内容の類似性に基づいて整理し、表3に示すようにカテゴリー化を行った。最後にPFLの枠組みに基づき、Knowing that(複

製できる知識)、Knowing how(応用できる知識)、Knowing with(学びの転移)に照らして整理し、大学での学びと経験がどれに相当するのかを検討した。妥当性を確保するため、観光系学部の教員1名とカテゴリー内容およびグルーピングについて確認しながら作業を進めた。ブライダル産業に勤務しているLについては他の11名とは別にカテゴリー化を行った。

以上の手続きにより、逐語録に内在する意味構造を保持したまま探索的に整理し、その後、既存理論との照合を行った。表3は、KJ法の手続きを援用してカテゴリー化した内容とBroudy(1977)の知識の三分類との対応関係を示したものである。異業種に従事する11名については、Knowing thatに該当する発話は確認されなかったため、表3はKnowing howおよびKnowing withのみを示している。

表3. KJ法によるカテゴリー化とBroudy(1977)の知識の三分類との対応

知識の分類	KJ法によるカテゴリー	カード内容(代表例)
Knowing how	プレゼンテーション	授業などでの発表経験を活かし、企画書作成や顧客への説明を行っている
Knowing how	フィールドワーク 課題解決の経験	観光地訪問で得た視点をを用いて、顧客の課題に対する提案を行っている
Knowing with	協同作業、団体活動	どのように他者への働きかけると作業や活動がうまくいくか、考え、行動化する
Knowing with	ホスピタリティ入門/ コンシェルジュ論	相手の立場や心情を考え、安心感を与える対応を心がけている
Knowing with	観光地理/歴史/世界 遺産に関する知識	観光地の知識、情報を顧客との雑談に活用し、信頼関係構築につなげている

(出所) 筆者作成。

(注) 発話者(A~K)は本文参照

4. 結果

第4章では、KJ法による探索的カテゴリー化の結果を、Broudy(1977)の知識の三分類に照らして整理した分析結果を示す。

4.1 異業種に従事している11名

発話内容をカテゴリー化し、Broudy(1977)⁽¹⁵⁾の知識の三分類(表1)に分類した結果、Knowing that(複製できる知識)に該当する発話を確認することができなかった。以下、Knowing how(応用できる知識)、Knowing with(学びの転移)について述べていく。

4.2 Knowing how(応用できる知識)

Knowing howに該当したのは、大学で身につけた知

識やスキルを現在の業務において応用している発話内容であった。発話内容には「プレゼンテーション」「フィールドワークと課題解決提案」「論理的思考」といった、観光系学部の学習経験に基づく実践的なスキルが含まれていることが確認された。

「プレゼンテーション」に関する語りでは、授業やオープンキャンパスで何度も資料作成や発表を行ったが、この経験が実務において、企画書作成や顧客への提案の場面で活かされていることが見いだされた (F, I)。構成力、説明力、視覚資料の作り方を応用しており、業務でのパフォーマンス向上につながっていた。

プレゼンをする機会が多くて、ゼミや授業での経験がすごく役立っています。大体の書式はあるものの、人それぞれやり方は違ってよいのです。私は、資料の色味や構成をどうするとよいかということに慣れているので、プレゼンに対する抵抗感がないです。(F)

また、フィールドワークやゼミでの課題解決視点を持って取り組んだ経験は、顧客の課題を把握し、解決策を提示する場面で活かされていることが確認された (I)。これは、大学で学んだ調査方法や観察の視点を実際の顧客の状況に合わせて応用するものであり、Knowing how の典型例だと考えられる。

クライアントから「この高級アイスクリームの売り上げを上げるために、どこに広告を出したらいいか」という相談がありました。「観光文化実践」いう、「観光の理論を学んだうえで現場に出かけていき、自分たちの目で確かめる」という授業で、六本木ヒルズをはじめ、いろんな商業施設について学び、実際に足を運んで自分たちの目で確認するというフィールドワークをしました。「こういう場所だったら、高所得者の人がいて買ってくれそうですよ」といくつかのテナントを提案しました。クライアントからも「どういう人が実際に来ているの」「テナントのどこに広告があるの?」と聞かれ、その都度、しっかりと答えることができて、結局、ヒルズ系の建物に広告を出すことに決まった、ということがありました。(I)

さらに、レポート作成や卒業論文で培った論理的思考は、顧客や同僚にわかりやすく説明する場面で活かされていることが見出された (B, C, D, K)。下記は、大学時代に培った文章構成力が対人コミュニ

ケーションに応用されている例である。

クリーニングの受付後、お客さまに確認のお電話をすることがよくあります。いきなり電話をするのではなく、伝えたいことを箇条書きにして、いったん台本のようにまとめてから、お客さまにお話するとスムーズにいくんです。レポートをたくさん書いたことで、説明するときに順序を立ててちゃんと考えてから話す、っていうのは、こういう場面で活かされていると思います。(B)

以上の Knowing how に該当する語りを整理すると、大学で学んだ知識と経験をそのまま活用するのではなく、業務の場面に応じて応用している点に特徴があると考えられる。

4.3 Knowing with (学びの転移)

大学での学びと経験を新しい状況の理解や関係構築に結びつける Knowing with (学びの転移) に該当する内容は4つのカテゴリーに分類された。

1つ目は、対人関係の構築に関する転移である。PBL (課題解決型授業) やサークル活動の経験を通じて、「自分が他者にどのように働きかけるとチームが動きやすくなるか」と試行錯誤した経験は、現在の職場における先輩・同僚との関係構築やチーム内での役割の遂行に結びついていることが確認された (A, G, H)。大学時代の人と協同して何かをやり遂げるといった経験が、職場での立ち振る舞いの基盤として再解釈されていたものと考えられる。

(SE は) チームで行う業務が主なので、同じ歩幅、理解度を持って「一緒にこのコードを書く」というスタンスが大事なんです。誰かが理解していなかったら内容をちゃんと教えて、理解度を一緒に進めていかないとうまくいきません。課題解決型授業で、誰か1人でもやる気がなかったらまともならないという経験をしました。当時、私は、適性を見てその人に向いていそうな業務…。たとえば、SNSの広報、資料作成などを任せました。人の適性を見極めて、一緒に同じ歩幅でプロジェクトを進めていくという姿勢は、今も活かされているって思いますね。(H)

2つ目に、相手の心情を理解し、状況に応じてふさわしい行動やふるまいを選択するという転移が見出された。ホスピタリティやコンシェルジュに関する授業において、相手の置かれた立場や気持ちを察した好事例に触れた経験は、顧客や同僚が困ってい

る場面での判断や行動に影響を与えていたことが確認された (A, B, D, E, F, H, I, J)。具体的な発話内容として「どうすれば相手が安心するか」「どのような対応が適切か」という内容が挙げられる。これらは、必修科目の観光英語を含む専門教育での概念理解を、異なる状況で再解釈して活用する典型的な Knowing with の働きであると考えられる。

豊洲のチームラボの建設現場で、外国人観光の方に道を聞かれることがよくありました。道案内の看板は日本語のみだったので、各現場の案内の所に英語や中国語表記を取りつけたらよいのではないかと思い、先輩に相談してみたんです。「お！それいいね!」という話になり、英語と中国語の案内ステッカーを貼りました。観光客だけでなく、外国人の業者の方からも「スムーズに仕事場に行かれるようになった。ありがとう。」と言われてうれしくなりました。(A)

「何か困っているときに、こういうふうにしてくれたから、私も次は同じように行動しよう」という思考を持ったり、周りの人に対しても自分にもプラスの影響を与える行動をしたいなっていると思いつつ仕事をしています。それはホスピタリティに関する授業を中心に観光学科の授業全部から学んだことだと思うのです。自分の人生のモットーに近いものになっていてすごく活かされている学びだと感じています。(G)

3つ目は、文化・歴史の知識を媒介とした関係構築が確認された。観光学や文化・歴史を学ぶ中で得た観光地や世界遺産に関する知識は、職場の同僚や顧客との会話のきっかけとして用いられていた。特に相手の関心に合わせて情報を提供することで、相手との距離を縮める働きを果たしていた (A, E, F, J, K)。知識そのものを再生するだけでなく、「かつて学んだ知識のある部分を取り出す(例:世界遺産検定)」「雑談に使う(例:台北の観光事情、K-POP)」という形で相手に応じて内容を再解釈して伝える点が Knowing with の特徴と一致するものと考えられる。

お客様が「家族で集まって台湾に行くのよ」という話をされたとき、「私、観光学を勉強していたんです。世界遺産検定を持っているんですよ」とお伝えしました。「あら、そうなの？台北のあたりで面白い観光地やお店ってあるのかしら?」「次にお会いする時までにはちょっと良さそ

うなところを見つけときますね」とお答えして、調べた情報や行ってよかったお店をまとめて印刷してお持ちしました。観光の知識や情報を持っていることでこんな風に次のアポイントも取れるし、定期的にお客様と会えたりするようになっていくんです。(E)

卒業論文では好きな K-POP について情報収集して書いたんです。同期に K-POP が好きな子がいて、韓国の話から始まってどんどん話すようになって関係性を築けたと思うんです。卒業論文は現在勤務している会社で印刷と製本をしたのですが、私が書いた卒論を今、お世話になっている先輩社員が読んでみたいなんです。「すごく面白かったよ」って言ってきて。好きなことをテーマに書いた卒業論文が社内での人間関係の構築に役立っています。(K)

最後に、身につけたビジネスマナーの再解釈も学びの転移として見いだされた。インターンシップに参加する前の事前授業で学んだ言葉遣いやメール対応、お辞儀、あいさつなどの所作は、顧客の信頼感を高め、同僚を安心させていたことが確認された (E, F, I, K)。これらは「状況に応じてどのマナーを選ぶか」という判断を伴っており、学びと実践の統合的な活用だと考えられる。

最初のうちは営業員として上司の横にいて静かにしていることが多かったんです。それでも(顧客の)会社に入っていくときには、普段使っているリュックは下ろして手で持っていき、あいさつする、ていねいにお辞儀して名刺をお渡しする、と本当に基本的なことですけど、自然にできたことでいい印象に見られたのかなと感じました。そういう礼儀やマナーって、知っているのと何も知らないのとでは大違いですからね。(K)

以上のように、Knowing with に該当する語りは、大学での学びをそのまま用いるのではなく、他者理解や状況把握を通して意味づけ直しながら活用している点に特徴があることが見いだされた。観光系学部で培われる多文化理解、ホスピタリティ、他者と協同して課題解決するといった学習経験は、異業種においても柔軟に転移されていると考えられる。

異業種に従事している 11 名の結果についてまとめたものを表 4「異業種に従事している 11 名の知識の三分類」に表す。

表4. 異業種に従事している11名の知識の三分類

知識の三分類	カテゴリ	観光系学部での学び・経験	異業種での活用場面	該当者
Knowing how:応用で きる知識	プレゼンテーション	授業、オープンキャンパスなどで資料作成とプレゼンテーションを数多く行った経験	企画書の作成、顧客へのプレゼンテーションがスムーズに行える	FI
	フィールドワークと課題解決提案の経験	都内の商業施設見学、ゼミで実践した課題解決提案の経験	顧客の課題を解決する提案を行い、採用される	I
	論理的思考	レポート作成、卒業論文執筆の経験	相手の心の動きを想像しながら順序立てて話す	BCDK
Knowing with:学びの 転移	PBL(課題解決型授業)、サークル活動などでの団体活動	自分が他者にどのように働きかけると活動しやすくなるか、考えて行動した経験	社内、チーム内における自分の役割の果たし方、社内(先輩、同期)との関係性の構築	AGH
	授業:ホスピタリティ・コンシェルジュに関する授業、観光英語	相手が置かれている立場、気持ちを察して行動した好事例を学び、ホスピタリティの重要性を認識した経験	相手(顧客、同僚)との関係性の築き方、困っている相手(主に顧客)を助けるための行動を起こす	ABCEFGIJ
	授業:観光地理学、観光歴史学、世界遺産に関する授業	国内外の主要な観光地、世界遺産に関する学習経験、現地視察	相手(顧客、同僚)が知りたい情報、ほしい情報を提供、特に営業員の雑談に取り入れて相手との距離を縮める	AEFJK
	社会で求められる基本的なビジネスマナー	学んだビジネスマナーをインターンシップで実践し、インターンシップをやり切った経験	言葉遣い、メール(スキル)、お辞儀(所作)において顧客や同僚を安心させる	EFIK

(出所) 筆者作成。

4.4 ブライダル産業に従事している1名

大学卒業後にブライダル産業で働いているLの発話から、大学の授業で学んだ知識が現在の業務に直接活用されているという発話が確認された。

ブライダルに関する授業で、近年、結婚式を挙げる人たちの年齢が上がっていると習いましたが、本当にその通りだと実感しています。ブライダル業界で働いている卒業生が話しに来てくれたこともあり、業界全体の知識を備えることもできました。おかげで、今のゲストリレーションの仕事も戸惑わずにできています。

また、ゼミでGoogle フォームを使ってアンケート調査を行い、結果をExcelにまとめたり、メールの送り方について学んだこともそのまますべて業務に活かされています。

観光系学部で習得した概念的知識は、業務に対する理解を促し、直接的に活用されていることが窺える。これは事実や概念をそのまま職務に適用するKnowing thatの典型例であると考えられる。異業種

に従事している11名の発話データから確認されなかったKnowing that(複製できる知識)は、ブライダル産業の日常業務において直接的に活かされていると言える。

5. 考察

本研究では、大学時代の学びと経験が卒業後に従事している仕事にどのように活かされているのか、という観点から観光系学部の卒業生に焦点をあて、インタビュー調査を行った。「観光系学部での学びと経験を異業種の日常業務に直接的に活用する機会は少ないが、学びと経験を何らかの形で再解釈し、学んだことを業務で使えるのではないかと考えたり、大学時代に経験したことが判断の助けとなっているのではないかと」という前提で、Broudy(1977)⁽¹⁵⁾の知識の三分類を本研究の分析枠組みとし、二宮(2024)⁽¹²⁾が論じた「学習経験」や「学習の再意味づけ」をより構造化した。

5.1 異業種に従事している11名

分析の結果、異業種に就職した11名についてはKnowing thatに該当する発話は確認されず、

Knowing how および Knowing with が中心であった。とりわけ Knowing with に分類した発話は、観光系学部で学んだ知識や経験が、顧客との関係構築や職場内でのコミュニケーションの取り方、相手のニーズの把握など「置かれている状況を解釈する際の枠組み」として活用されている点に特徴が見られた。これは、観光系学部での学びと経験が、仕事の場面で直面する新たな課題、問題に適応するための基盤となっていたと考えられる。観光系学部で獲得した知識は、異業種においてそのまま再生、適用されないものの、相手の状況、興味・関心に適応しうる認知的資源として機能し、それを「自分の強み・特徴」と認識していたことが示唆された。たとえば、介護施設で介護職員として勤務しているCは、自分の強み・特徴について次のように語っている。

入所者さんは、毎日お食事を楽しみにしている人もいらっしゃるって、お出しするとみんなうれしそうに笑ったりするんです。「私は観光系学部で有名なホテルやレストランの見学に行ったりしたんですよ」とお話すると「へえ～、そうなの?」「なんていう名前のホテルなの?」と興味を持って反応されます。お出しするときもレストランをイメージして「お食事でございます」と優雅に対応するとさらに笑顔になるので、そういったところで私の特徴が活かしているなとうれしくなりますね。

証券会社の営業職に就いているEは、次のように述べている。

経済学部の人たちが大学で学んできたことは、確かに入社時には(証券会社の社員として)知識のベースになると思います。でもそれは勉強を日々すれば、なんとなく追いついていくっていう感じがします。私は大学時代の蓄積がない分、(証券の)知識の部分では戦えないなと思うんですけど、観光関連の知識はどの営業員にもあるわけではなく、私だけの強みにはなっているのでお客様との関係を築くうえですごく活かされているなって思いますね。

一方で、観光系学部での学びと経験を自分で再解釈し、アパレルの接客の際に活かそうと意識しているJは次のように語っている。

自分の中で大学時代に学んだホスピタリティやコンシェルジュに関する授業が一番役に立って

います。でもホスピタリティについては学生時代にもっと深掘りして勉強して身につければよかったかなとか思ったりします。

お得意様がいらっしゃったら、「今日もお暑い中ありがとうございます」という声かけをしていますが、それは他のみんなにもできることなんです。自分にしかできないホスピタリティを發揮したいって思います。学生時代にもっとホスピタリティを深く学んでいたら、もっとよい対応ができたのではないかと思ったりしています。

Jは現職での顧客対応において、「自分にしかできないホスピタリティを發揮したい」という課題意識を持ち、大学時代の学習経験を活かしながらどのようにスキルアップしていくか、試行錯誤していることが読み取れる。「学生時代にもっと深く学んでおけば、より良い対応ができたのではないか」と語る点は、過去の学習を将来の学びの方向づけとして再解釈していることを示しており、山口(2008)⁽¹³⁾が指摘する「Knowing with による将来の学習準備」に該当するものと考えられる。すなわち、観光系学部での学習経験は、①現職における自分の強み・特徴を認知する、②現職で直面する課題を理解し、さらに学び直す必要性を認知するという2つがあると考えられる。

5. 2 ブライダル産業従事者との比較

Lの発話からは Knowing that (複製できる知識)が明確に確認され、大学時代に得た観光関連の専門知識(ブライダル、ホスピタリティに関する授業など)、PCスキル、ビジネスマナーが業務に直接的に役立っていることが見出された。この点から、人文社会系学部における学習経験が「専門的な知識」「専門的な知識に基づいた経験」と「汎用的な技能」の双方を持つことを確認した二宮(2024)⁽¹²⁾の知見と同様の結果が得られたといえよう。しかし、観光系学部の場合、専門性がより職務内容に直結しやすい領域が存在する可能性がある。すなわち、観光学は学際的でありながら、旅行、ブライダル、エアライン、ホテルといった産業に特化した知識体系を含んでおり、これらは同業種に就職した卒業生にとって「Knowing that」として機能しやすいと考えられる。一方で、同じ学習経験を持つものの、異業種に就職した11名の場合、業務の直接的な専門性としてではなく、状況理解や対人関係構築の基盤としての「Knowing with」や業務遂行の技法としての「Knowing how」へと転化し、自分の強みや特徴を認

識させる働きを果たしていた。このことは、観光系学部がもつ専門的知識が、就職先の産業構造や職務特性との関係で多層的に作用していることを示唆しているといえよう。

したがって、観光系学部における学びと経験は、就職先によって異なる知識形態として立ち上がる可塑性を備えている点に独自性があるといえよう。特に観光サービス産業においては、観光系学部の専門教育の内容が「Knowing that」として直接的に業務に結びつく一方、異業種では「Knowing with」などの形で新たに再構成されるという、知識の二重構造を見出したところが本研究の意義だと考えられる。

5. 3 観光系学部生に対するキャリア支援

就職時に観光産業を第一志望とする学生が半数に満たない大学が 65.5%を占める(森下, 2018)⁽²⁾ という観光系学部生の状況は長年にわたって続いている。異業種に進もうと考える学生は、観光系学部で学んだ内容が卒業後にどのように仕事と関連し、活かされるのかを知ったうえで、自分に合った業種・業界を検討していくと就職不安の軽減につながる可能性がある。専門教育においては、各業界を熟知した教員が授業を担当し、ゲスト講師を招聘する場合も授業内容に関連する業界で働く社会人が登壇するのが一般的であろう。小山(2025)⁽⁴⁾の研究結果から明らかになっている「2年生の夏ごろから、自らの価値観や思考を問い直し、観光業界以外の進路を検討する傾向にある」をふまえると、2年次生を対象に次の2点についてキャリア支援していくことが望まれる。

- ①観光系学部での学びと経験が仕事にどのように活かされるのかというテーマの授業、講座の実施
- ②観光系学部の専門知識は観光産業と異なる業種・業界でどのように活かされているか、という事例の共有

観光系学部で得た知識は、異業種において「Knowing with」などの形で新たに再構成され、仕事をするうえで自分の強みや特徴になっていくという見通しを学生自身が持てるようになれば、大学として観光産業はもとより他業界でも活躍する人材を輩出する(高橋, 2019)⁽³⁾ ことにつながっていくものと考えられる。

6. おわりに

ブライダル産業に就職した卒業生(L)においては、観光系学部の専門的知識が業務理解に直接的に結びつく Knowing that に関する発話が確認された。

一方で、異業種に進んだ 11 名については、大学での学びと経験が業務の実践的な判断の基盤として柔軟に活用されていたことが見いだされた。これらは Knowing how や Knowing with に相当し、観光系学部での学習経験が新たな場面で再解釈され、将来の学びや業務改善に向けて活かされていると考えられる。特に J の語りに象徴されるように、大学時代の経験を振り返り、自身の強みや学び直しの課題を見出すプロセスは、山口(2008)⁽¹³⁾のいう PFL

(Preparation for Future Learning)の観点からも捉えることができ、観光系学部での学びが「将来の学習を方向づける基盤」としても機能している可能性が示唆された。

以上のことから、本研究は、観光系学部の学びが異業種においてどのように再解釈されるのかを、理論枠組みを用いて構造的に示した点に意義がある。とりわけ、学習の転移研究や経験学習研究の知見に、観光学という学際的な学問領域の教育的特性を接続させた点は、観光教育研究において新たな議論の基盤となる可能性を有していると考えられる。

しかしながら、本研究は探索的研究であり、得られた知見は一般化を目的とするものではない。以下に示す点から、本研究の結果は仮説的・示唆的知見として位置づけられる。

第一に調査対象は 12 名と少数であり、特に観光関連産業に従事する卒業生は 1 名のみであった。そのため、どのような専門知識が業務との関連性が強いのか、業界別(航空、ホテル、旅行など)に従事する卒業生への追加調査が求められる。

第二に本研究の調査対象者は卒業後、数年以内の初期キャリア段階にあり、知識の転移のあり方がどのように変化するのかについては十分に検討できていない。キャリアの成熟段階における学習の再意味づけのプロセスを縦断的に追跡する研究が必要である。

第三に本研究では個々の語りを中心に分析したため、組織文化、職場環境、上司との関係など、学習の転移を促進・阻害する外的要因を十分に調査できていない。以上の3点を今後の筆者の研究課題とし、より多面的な分析を行っていきたい。

謝辞

本研究の実施にあたり、12名の卒業生の皆様に多大なるご協力をいただきました。また、KJ法によるカテゴリー化および解釈の妥当性については、川村学園女子大学観光文化学科、山田祐子先生より貴重なご助言を頂戴しました。ここに深謝申し上げます。

注

- (1) 七枝敏洋 (2020) 「観光関連産業を目指す学生の職業意識について—観光系学科と他学科の学生の就職意識の差異から—」『HOSPITALITY』第30号, 日本ホスピタリティ・マネジメント学会, pp. 75-84.
- (2) 森下昌美 (2018) 「観光人材育成における産学ミスマッチに関する一考察—観光産業と観光系大学へのアンケート調査分析より—」『日本国際観光学会論文集』第25号, pp. 85-90.
- (3) 高橋伸子 (2019) 「観光系大学における教育が観光産業に果たす役割」『日本労働研究雑誌』No. 708, pp. 31-46.
- (4) 小山知子 (2025) 「観光系学部で学ぶ大学生の進路意思決定プロセス—A大学の事例—」『HOSPITALITY』第35号, 日本ホスピタリティ・マネジメント学会, pp. 59-68.
- (5) 小林奈穂美 (2009) 「観光産業に対応した人材と教育に関する基礎的研究」『駿河台大学論叢』第39号, pp. 197-226.
- (6) 矢島敏郎 (2013) 「旅行会社と観光系学部・学科の教育連携に関する考察」『日本国際観光学会論文集』第20号, 日本国際観光学会, pp. 55-61.
- (7) 加納和彦 (2013) 「観光関連学部・学科等における「学び」と将来の「仕事」との関係について—愛知淑徳大学交流文化学科観光分野選考での調査結果を参考に—」『愛知淑徳大学論集—交流文化学科編』第3号, pp. 54-63.
- (8) 井上はるか、寺澤愛望、井上育美、橋井智美、弘瀬まち香、吉田道代 (2018) 「大学で観光を学ぶ意義—和歌山大学観光学部学生の視点から—」『観光学』18巻, pp. 73-80.
- (9) 二宮祐 (2025) 「聞き取り調査の結果からみる人文社会系大学教育の職業的レリバンス—学問分野別の知識習得度項目に着目して—」『文系大学生は専門分野で何を学ぶのか』本田由紀編, ナカニシヤ出版, pp. 81-104.
- (10) 日本学生観光連盟 (2015) 「観光教育と進路選択の接続性を考える—観光系学部・学科4年生100人調査から—」『観光ホスピタリティ教育』第8号, pp. 106-108.
- (11) 高山啓子 (2020) 「観光教育実践におけるアクティブラーニング」『川村学園女子大学研究紀要』第31号, pp. 89-103.
- (12) 二宮祐 (2024) 「若者の仕事と人文系学部・学科における学習経験—大卒就業者を対象とした聞き取り調査から—」『関西大学高等教育研究』第15号, pp. 77-88.
- (13) 山口悦司 (2008) 「学習の転移に関する研究ノート—Bransford&Schwartzの「将来の学習のための準備」について—」『宮崎大学教育文化学部紀要—教育科学』第19号, pp. 1-11.
- (14) Bransford, J. D., & Schwartz, D. L., *Rethinking Transfer: A Simple Proposal With Multiple Implications*. Review of Research in Education, Chapter 3. Vol. 24, 1999, pp. 61-100.
- (15) Broudy, H. S., *Types of knowledge and purposes in education*. In R. C. Anderson, R. J. Spiro & W. E. Montague, *Schooling and the Acquisition of Knowledge*, 1977, pp. 1-17.
- (16) 川喜田二郎 (1967) 『発想法』, 中央公論新社, pp. 46-118.